

大江戸黄金狂

野村胡堂

青空文庫

第一の手紙

やまうらじょうたろう

山浦丈太郎は、不思議な手紙を受取りました。その意味は

。

そのほう

其方は人を殺した。それはお家の奸臣を除くためであつた

としても、人間一人の命を絶つたことには何んの変りもない、

其方も武士なら、来る八月の十五日箱根の間道を登つて、太

閤道の辻堂の前に、日没と一緒に立つがよい。その方を親の

敵と狙う、万田龍之助は父祖由緒の地に其方を迎えて、敵

名乗をあげるだろう。最早主家帰参の望も絶えた其方だ、潔

よく龍之助に討たれて、孝子の志を遂げさせるがよい。若し逃げ隠れするに於ては、この旨日本六十余州の津々浦々に伝え、百代の後までも、其方を卑怯者の見本として、物笑いの種にするであらう。

かなり手厳しい文句ですが、真四角な字を書いているくせに、何処かに優し味があつて、女文字らしい匂いがあります。

「馬鹿奴ツ」

山浦丈太郎は、その手紙を掌の中で揉んでポイと捨てました。腹の底からコミあげて来るのは、我慢のならないいまいましてです。

三年前まで、小田原の城主大久保加賀守に仕えて、百五十石を

食はんだ山浦丈太郎は、箱根の関所の役人をしてゐる時、同役万田くろうべえ九郎兵衛の容易ならぬ非曲を発見し、面責して恥しめられ、訴えて聴かれなかつたので、腹を据え兼ねて万田九郎兵衛を斬つて捨て、江戸に飛出とびだして、心細い浪人生活を續けているのでした。

その後、役人の取調とりしらべにつれて、関所手形を贋造して、小田

原の旅籠屋はたごやの怪し気な客引きに売らせ莫大な利益を取り容れてい

た、万田九郎兵衛の非曲ことごとは悉く知れましたが、山浦丈太郎の功を

嫉ねたむ者があつて、「山浦も同じく関所役人だ、万田と同腹で悪事

を企て、利益の割当が少なかつたので、万田を斬つたに違ひない」

と言ひ触らされ、何時いつまで経つても大久保家から召し還しの使者

が来ないばかりでなく、反対に刺客を放つて、山浦丈太郎を覘ねらつ

ているという噂さえ立ち始めました。

そんなに曲解されなければならぬ境遇や、その日の物にまで事欠く、三年越の浪人生活に、山浦丈太郎悉く嫌気がさしている矢先、この不思議な手紙を受取ったのです。

「よし、それならば、討たれて死んでやろう。俺の言い分の通らない世の中に、貧乏し乍^{なが}らビクビク生きているより、悪人の倅^{せがれ}でも親の敵を討とうと言う、殊勝な孝子の刃に掛けて死ぬのも武士の本懐だ」

山浦丈太郎は、物事をそんな風に考える男でした。

取って二十八の良い男、箱根焦^やけのした浅黒い顔、見事な恰幅、羽織も袴も七つ下りですが、腰の物だけは親譲りの立派な相州物、

何も彼も叩き売った一両二分の金を懷にして山浦丈太郎悠然として、敵討たれの旅に上ったのです。

時は正徳三年八月の初め、七代將軍家繼いえつぐの時代、江戸は驕者の埧塙るつぼとなつて、何処どこの社会でも、金が慾しくて慾しくてたまらなかつた頃のことでした。

浪人者のみじめさは、こんな時ほど身に染みます。腕おぼえに覺があつたところで糊米ほどの祿を出して召抱めしかかえる大名もなく、棒振劍術の道場は、稲荷の祠と数を争う江戸の街で、浪人者の生活の足しになる仕事などは、金の草鞋わらじで捜しても見付かりません。下手な謡曲などを唸うなつて、一文二文の合力に命を繋ぐより、思い切つた敵討にでも出逢でくわして、威勢よく死んで了しまえ——。

山浦丈太郎ならずとも、落ち果てた浪人者が、そう言った心持になるのは無理のないことでした。

第二の手紙

武州八王子にこれも佗しく暮している浪人者、万田龍之助も、同じような手紙を受取りました。

其方も最早十八歳ではないか、親の敵の山浦丈太郎が、目と鼻の間に居るのに、何んという不甲斐ふがいのないことだ。父親の九郎兵衛に少しばかりの非曲はあつたかも知れないが、それを洗い立てた上に、手に掛けて殺したのは山浦丈太郎だ。そ

の敵も討たずに、お染の愛に溺れ、八王子から一步も踏み出す心の無いのは、何んという見下げた性根であろう。それほどお染の傍を離れるのが嫌なら、一緒につれ立って、敵討の旅に出るがよい。来る八月十五日の日没頃、其方のためには不倶戴天の敵山浦丈太郎は、箱根の間道太閤の辻堂の前に立つて居ることになっている。夢々疑うまいぞ。この折を取逃しては、親の敵を討つ望はのぞみまずあるまい。穴あなかしこ賢、人に語るな。

人をな嘗めたような調子ですが、ひどく真実性があります。これを読んでいるうちに、万田龍之助は、背中へ一斛いっこくの冷水をブツかけられたような心持になりました。

僅^{わず}か三年前の出来事で、龍之助も悉く事の経緯を知って居ります。父親九郎兵衛は同役山浦丈太郎に殺されたには違いありませんが、非は悉く父親九郎兵衛にあつて、斬った山浦丈太郎には、何んの怨む筋もありません。関所役人の端くれに連なりながら、関所手形の贖物を造り、莫大な不義の金を積んだ父親の悪事は、生きているうちに罪に問われると、磔刑になつても足らなかつたでしょう。それを斬った山浦丈太郎に、敵名乗をあげる顔は、万田龍之助には無かつたのです。

だが、敵の所在が斯^こう判^{はつきり}然わかると、人の子として、萬田龍之助は凝^じつとして居るわけに行きません。

「よし、敵山浦丈太郎を斬つて、父親と一緒に、八寒地獄へ真つ

逆様に落ち込んでやろう」

そう言った無法な心持が、万田龍之助の若い血潮を湧き立たせたのも無理のない事でした。

「龍之助様、何処どこへいらつしやいます？」

旅仕度もそこそこ、八王子の町を飛出した万田龍之助の後から、斯こう声をかけたものがありました。

龍之助が三年前小田原を追われてから、世間を狭く身を寄せた、遠縁の高たか山某やまの一人娘お染、龍之助より一つ年上の十九ですが、郷土の子に生れて、都振りの華やかな空気の中に育ち、取なしが初々なましいうちにも、艶めかしく愛くるしいところのある娘でした。

「いや、なに、ツイ其処^{そこ}まで」

龍之助は少しヘドモドしました。

「龍之助様、箱根へいらつしやるのでしよう」

「え？」

「私も一緒におつれ下さい、お願いでございます」

「――」

町外れの木下^{このしたやみ}闇へ誘い入れると、顔を染める青葉の蔭にお染は可愛らしく手を合せるのです。

「龍之助様、私にもこんな手紙が参りました。御覧下さい」

お染が懷から取出したのは、龍之助が受取った不思議な手紙と全く同じ筆跡で、斯^こう書いてあるのです。

——万田龍之助は、親の敵を討つために、箱根の間道へわけ入ることになっている。相手は山浦丈太郎という勇士、龍之助一人では討ち取ること思ひも寄らない。龍之助を助け度い^たと思うなら、直ぐ^す様後を追うがよい。南蛮渡来の短筒を一挺貸してやる。これさえあれば、女の細腕一つでも大の男に向うことが出来る筈だ^{はず}——。

あまりにもよく行^{ゆきとど}届いた文章、誰の仕業^{しわざ}ともわかりませんが、万田龍之助ゾツと肌寒さを覚えしました。

「短筒というのは？」

「これでございます」

お染は重そうに持って来た包を解くと、中から現われたのは、

金銀の象眼を施した、南蛮物の凄まじい短筒が一挺、万田龍之助は、自分が引ず^{ひき}られて行く運命の恐ろしさに、何んとなく身内の顫^{ふる}えを感じます。

短筒を取上げて、巨大な蟲^{むし}でもあるように、無気味な心持で見極めた龍之助は、

「何が行手にあるか少しも解らないが、兎^とも角^{かく}私は行つて見る外^{ほか}はあるまい。お染殿はなる可^べく此^{ここ}処から戻るのだ」

「でも龍之助様」

お染は鉄砲を搔い抱く恰好で、クネクネと身体^{からだ}を振ります。

「母上が御心配なさるだろう」

「いえ、母様へもそう申して参りました。母様は——龍之助様先

途を見届けるのはお前の役目、私は決して止めはしない——と仰おつしやいます」

「――」

龍之助は涙ぐましい心持でうなずきました。

厄介の貝六へも

人呼んで厄介の貝かいろうく六、海道筋でよくない事ばかりしている中

年男のところへも、仮名書きの不思議な手紙が届けられました。

「小父おじさん、やつけえのけえ六というのはお前さんだね」

大磯の居酒屋でとぐろを巻いているところへ、十二三の可愛ら

しい小僧が声を掛けたのです。

「何？ やっけえのけえ六？ ——馬鹿にするねえ、そんな珍毛

唐見てえな名前なんか持つて居るものか、畜生ツ、人の面ジロジ

口見やがると目玉をくり抜いて、田螺合たにしあえにして食っちまうぞ——

——驚いたか小僧奴めツ」

粕臭い息をフーツと吹いて、クルリと向うを向いてしまいました。
た。

「だって、左の耳みみたぶ朶が無く、黄色い大きな歯が二本飛出して
るのが、やっけえのけえ六だって教わったんだぜ」

「やいやいやい、人の面の棚卸おろしなんかしやがって、耳朶なんか、
喧嘩で食い切られたんだ。こんなものを右左へくっ付けて置くこ

とがあるもんか、とんだ清々せいせいして良い心持だ。嘘だと思ったら、手前も取払って見ねえ」

「御免だよ、耳朵を取払った代りに、齒が飛出しや元々だ」
「抜かしたな小僧」

「怒ったって怖くも何んともないよ、それより、やつけえのけえ六なら白状した方が宜いいぜ。綺麗な女の人から手紙を頼まれて来たんだから」

様子が滅法可愛らしい癖に、言うことは恐ろしく憎にくてい体です。

「何？」

「だから白状しねえ、やつけえのけえ六ならやつけえのけえ六と

――

「貝六は俺だよ、江戸から箱根までの間に、憚り乍ら貝六といふ人間は俺より外にはねえ筈だ。厄介のけえ六なんて、人面白くもねえ、誰がそんな名前を付けやがったんだ」

「それ見ねえ、やつぱり厄介の貝六じゃないか。それよ、手紙は確かに渡したよ。お駄賃がうんと出ているんだ。あとで受取らねえなんて言っちゃおいらの落度になるぜ」

「何を小僧奴^め」

厄介の貝六は小僧から手紙を受取ると、クルクルと巻き込んだ半切を開いて行きました。美しい仮名文字が五六行、

「読めるかい、親分」

「何をッ」

「その手紙が読めるか——てんだよ、皆みんな仮名で書いてあるじゃないか、そいつが読めなかった日にや——」

小僧は傍を向いて赤い舌をペロリと出しました。

「何をツ、陽が影かげつて、少し薄暗いから読めねえや」

「うまく言うぜ、——読んで上げようか親分」

「何をツ」

厄介の貝六は負け惜しみを言い乍らも、小僧の手に手紙を渡す外はありません。

「面白いことが書いてあるぜ、けえ六親分」

「何を」

「親分は見かけに依よらない色男だね、ウ、フフフ」

「一人で笑つて居ずに、さつさと読みやがれ。何時^{いつ}までも眺めて居ると、手前の涎^{よだれ}で手紙の字が伸びるぜ」

そう言い乍らも、貝六はすっかりじれ込んで居りました。

「こんな手紙を、唯^{ただ}で読んじやつまらないねエ、少し何んとか色をつけなよ、親分」

「何を言^いやがる」

「斯^こうだよ、親分、——『ちよいとけえ六親分、私と世帯を持つ気はないかえ、気が向いたら箱根へ来なよ、たいこう道の辻堂の前へ、十五日のお月様の晩、日の暮れるころ、良い男の親分の顔を持って来なよ、——小田原のあの子』とね」

「小田原のあの子、はてな？」

貝六は小首を傾げました。小田原の飯盛に嫌がらせをしたのは幾人もありますが、箱根の山の中へ呼出よびだされるほどの深間は一人も無かったのです。

厄介の貝六は狐につままれたような心持でフラフラと外へ出ました。

赤崎才市へも一通

「貝六」

押し冠かぶせるように野太い声、

「何をツ？ 間抜け奴めツ」

反抗的に肩を聳^{そび}やかせて、ヒョイと顔を挙げると、眼の前にヌツと立ったのは、定九郎を素で行ったような、恐ろしく自棄な浪人者でした。

「大層な機嫌だな、貝六」

「おや、赤崎^{あかざき}の旦那で？」

貝六は拳固でペロリと顔を撫で廻しました。この凄味な浪人者赤崎^{さいいち}才市には頭の上らない理由がありそうです。

「旦那って程の面じゃねエが、間抜け奴^めは挨拶だな」

三十五六、色白で、長身で、腐った羽^{はぶたえ}二重、五十日月^{さかやき}代、禿

ちよろの朱鞘、麻裏を突っかけて、裾を少し摘^{つま}み上げ乍ら片手の妻楊子^{つまようじ}で齒をせせっている図は、どう見てもあまり結構な人柄

ではありません。

「勘弁しておくんなさい、その朱鞘が目に入らねえほど面喰つて居たんで」

「ハテネ」

赤崎才市はプツと楊子を吐きました。

「ところで御用は？ 旦那」

「外じゃねえ、手前がツイ今しがた、小僧の手から受取った手紙があるだろう」

「へエー」

「お易い御用だ、ちよいとそれを見せてくれ」

「お易い御用じゃありませんぜ、旦那、一生に一度の女運をさら

われた日にや、あつしは浮ぶ瀬が無くなりまさら」

「馬鹿だなア、——女運だと思つてやがる、そんな氣でうかうかと太閤道へ行くと、運がよくて関所破り、悪かった日にや、そのガン首が一ぺんに飛ぶぜ」

「おどかしつこなしに願ひやしよう。こんなに見えても、あつしは臆病者で、ヘツ、ヘツ」

「厄介の貝六が臆病だった日にや、世の中に肝の太い人間が無くなるよ、——まア宜い、俺を疑うなら、ボンヤリ太閤道へ、行つて、その薄汚いガン首を無くして来るが宜い」

赤崎才市は、斯こんな事を言つて、クルリと背を見せるのでした。「待つておくんない、旦那、あつしの首を取つて何んの禁呪まじない」

になるんで、懷には百だつてありやしませんよ」

「望みは金じゃないよ」

「へエー」

「先刻手前へ女文字の手紙を渡した小僧は、俺にも一本渡して行つたんだ、——隠すものか、俺はそんな料見の狭い人間じゃねえ、これだよ、ほら」

赤崎才市は、懷から分厚の手紙を一本取出して、何んの蟠りもわだかまなく貝六の手にのせてやりました。無意識に開くと、中は六つむかしい字で一パイ。

「こいつは読めませんよ旦那、自慢じゃねえが仮名でせえ小僧に読んで貰つたあつしだ」

「そんな事が自慢になるものか」

「読んで下さいよ旦那」

「読んでやっても宜いが、今日、たった今から、お前は俺の仲間になるか」

「へエ」

「驚くな貝六、——仔細あつて俺は、この機^{からくり}関の裏を知つて居るが、こいつは七万両という大金の仕事だぞ」

「七万両——、待つておくんなさい旦那、七万両というと、一体どれ位の金で？」

「一両小判が七万枚だ、——そいつを一人占めにする手段も知つて居るが、向うに廻る人間が恐ろしく手剛^{てごわ}い、貝六風情に七万両

山分けでは少し甘過ぎるが、猫の子の手でも助太刀に欲しい時だ、どうだい俺の仲間になって、大山を張る気はないか」赤崎才市の話は恐ろしく奇っ怪です。

「そいつは旦那」

貝六はゴクリと固唾を呑みかたずました。あまりの事に続く言葉も出ません。

「七万両と聴いて肝を潰すなんぞ、厄介の貝六に似気ないことじゃないか」

「驚きやしませんか、そいつはあんまり話が大きくて本当らしくはありませんぞ旦那」

「よしよしそれじゃ嘘だと思って来て見るが宜い、今から八月の

十五日まで——三日の間俺に手伝ってくれたら、日当一両ずつ出すよ。その代り七万両の金が入ったって、手前には一文もやらないよ」

「日当一両も悪くねえが、七万両の山分けの方が、少しばかり分が良いようだ。乗りますよ、旦那その割勘の方に」

「人間はあまり賢^{かし}くねえようだが、勘定は確かだな、三万五千両の方が多いつてことを、ちゃんと心得てやがる、その気で今日から仲間付き合いだ、宜いか貝六、前祝に一杯やり度^てえが、手前五百や一貫は持つてるだろうな、男のたしなみだ」

「ヘツ、自慢じゃねえが空^けつ尻だ」

「顔で吞める店は無いか」

「八方塞がり」

「呆れた野郎だ、その絆纏はんでんを脱ぎな」

「ワツ、この一張羅を剥がれちや道中がならねえ、そいつは殺生過ぎるぜ旦那」

「何を言やがる、人に訊かれたら雲助の真似まねをしろ」

性格の破産者と信用の破産者、何方どちらも触れば棘の突ささるような二人が、斯こうして共同戦線を張ることになったのです。

七万両の宝

「もう少し詳しく話しておくんなさい。絆纏一枚が惜しいわけじ

やねえが、七万両の夢を見て、風邪を引いちや割に合わない。これは一体どうしたことなんで？ 旦那」

厄介の貝六は、店の中に誰も居ないのを見定めると、盃を置いて赤崎才市の方へ膝を寄せるのでした。小田原の町外れ、上り下りの客に、一番安くて盛沢山もりだくさんな中ちゆうじき食ござを食わせようという、一ぜん飯屋の奥、煮しめたような莫座もざの上に列ならんで坐つて、宜い加減陶然とした二人でした。

「誰も聴いちや居まいな、貝六」

「時分時でないから大丈夫でさ、猫の子が一匹耳をすまして居るだけだ、勘定が済んだら、親父は安心して奥へ引込んだし、小女はつまみ食いで大おおわらわ童だ、耳なんか節穴ほどの役にも立たねえ」

店の内外をひとわたり見極めて、貝六は元の席に帰つて来ました。

「それじゃ話して聴かせる、驚くなよ、貝六」

「驚くな——たつて、眼なんか据えて乗出されちや大概肝を冷や
すぜ、旦那、あまり結構な人相じゃねえ」

「無駄を言うな、——手前の守り袋か臍の緒書きの中に、得体の
知れないものを描いた、変てこな紙片かみきれが入つちや居ないか、——
——先まずそれから聴こう」

赤崎才市は物々しく始めます。

「ありますよ、旦那、死んだお袋が肌守の中に縫い込んでくれた
んだが、何んでも三寸四方ほどの小さい紙片で、蜘蛛の巣のよう

なものと、六つかしい字が書いてある筈だが——」

「それだよ、貝六、それが有りや、手前も おおくぼいわみのかみ 大久保石見守の子孫の一人だ、七万両のうち一万両だけは威張つて貰える」

「へエ、一万両」

「宜いか、よく聴くんだぞ、——今から丁度 ちようど 百年前、慶長十八

年八月十五日に亡くなった、大久保石見守という人は、若い時分は能役者だったが、東照家 いえやす 康公の御眼識 おめがね に叶つて、金山奉行を

承り、日本中の金銀銅鉄鉛の坑領り、一時は天下の租税を管して、威権宗臣を過ぐと言われた。——話は六つかしくて判るまいが、

兎に角、日本中の金山を一手に引受けたんだから、自分の懐へもどれだけ金が入ったかわからない」

「へエー」

話の重大さに貝六はすっかり圧倒されました。

「その大久保石見守は、武州八王子で、三万石を食んで亡くなつたが、死んだ後で大変な騒さわぎが持もち上あがった。——それは、遺書に七万両の大金を、七人の妾めかけに形見としてわけてやると書いてあつたからだ。妾から早速七万両の金を引渡すように総領の藤とうじゅうろう十郎に迫つたが、藤十郎はそれを聴き容れない。さんざん揉み抜いた揚句、公沙汰になつて、公儀役人が八王子の屋敷くらへ乗込んで調べると、驚いたことに、屋敷の庫くらも、石見守が生前役得として取込んだ金銀珠玉の山だ。その上禁制の切支丹きりしたんの伝書や、異国交易の文書があつたので、領地を召上げ、財貨を官没し、長男藤十郎

以下、外記^{げき}、権之助^{ごんのすけ}、雲十郎^{うんじゅうろう}等七人の子女は、一人残らず斬られたり流されたり、大久保石見守の遺した財宝は一ぺんに形無しになってしまった」

「ところが不思議なことに、七人の妾に分けてやると言つた七万両の金だけは、何処^{どこ}を捜しても出て来ない。公儀役人も、手を変え品を代え捜し抜いた。が、どうしても判らない」

「無い筈だ。その七万両というのは、大久保石見守が、家康公の命令で、最初に伊豆^{いず}の金山を掘つた時、後日のために、掘つた黄金の一部を割いて箱根の山中に隠して置いたのだ。その頃箱根に

はまだ関所はなかった。石見守は腹心の家来いしざかさもんじ石坂左門次に命じて、その黄金を箱根山中の何処どこかに隠させ、後口実を設け、黄金を隠した家来——石坂左門次を斬り、絵図面だけを手筐てばこに入れて、寝間の床下に埋めて置いた」

「——」

「その手筐は公儀役人に没収されたが、役人に見付けられる前、総領の藤十郎はそつと絵図面だけを拔出ぬきだし、恐ろしい災禍の身に及ぶのを覚つて、七つに切つて七人の兄弟に頒けわ、秘ひそかに七人の子孫に伝えて、何時いつかは七枚一時に世に出て、秘めた七万両の宝が、大久保家の再興に役立つように念じて刑死した」

「——」

「七つに切った絵図面は、大久保石見守の百年忌に、箱根の山の間道で一緒に集まることになったのだ。こいつはまぐれ当りや、物のはずみじや無い。死んだ石見守の導きか、——いや、そんな事でもあるまい。俺達の眼にも止らない恐ろしい人間が、逞ましい智慧を働かせて、絵図面の切れを持った大久保石見守の七人の子孫を、糸をたぐるように、日本国中から箱根へ集めているのだ」

そう言う赤崎才市も、不敵な眉をひそめて、逞ましい肩をゾツと顫わせました。

「で——」

貝六は何んべん固唾を呑んだことでしょう。

「大久保石見守の子孫は、四方八方に散って居る。勝手な苗字で

勝手な仕事をして居る。この赤崎才市もその一人なら、お前——
厄介の貝六もその一人だ。七人の子孫が集まつて、仲よく一万両
ずつ分けるなら物事は穏かだが、——俺から始め、そんな事じゃ
イヤだ。七万両みんなか、元の奎阿弥^{もくあみ}かだ。七人のうちには太い
奴も居るだろうが、七万両皆んなさらつてやろうと、爪を磨いで
居るのはこの俺ばかりじゃあるめえ」

赤崎才市の話は、厄介の貝六の肝を奪いました。二朱や一貫の
強請^{ゆすり}を大きい事にして居る貝六に取つて、七万両の世界は、何ん
と言う途方もない——想像を絶した境地だったでしょう。

「旦那、——そ、そいつは驚いたね、あつしなら、七万両が七十
両でもオンの字だが、斯^こうなりや意地だ、見事七万両を手に入れ

て、山吹色の山の上で昼寝をして見たくなつたよ」

「好い心掛だ、その気で一つやつてくれ」

「差^{さし}当^{あた}り何をやらかしや宜いんで、旦那」

「ちよいと、女の子を一人さらつて、若い武家を一人睡^{ねむ}らせるんだ」

「へエー、安く言うが、そいつは大仕事だぜ」

「そんな気の弱いことじゃ、七万両の夢を見るのも六つかしいぞ、宜いか、貝六」

赤崎才市は貝六の耳に口を寄せました。

「お、^{くすぐ}搦^てつ度え」

「贅^{ぜいたく}沢を言うな、汚ない耳だなア、たまには掃除をしておけ」

「其処までは届かねえ」

「寝物語なんてものを無いからだよ」

無駄を言いながら、何やら囁く二人、それを奥の一と間から、

凝と耳を済まして聴いて居る旅の雲水のあることには気が付きませんでした。

旅の雲水、名は空善、これも同じような不思議な手紙を貰つて、箱根の間道へと急いで居たのです。

雲水空善は腹痛を起して、店の奥に横になつて居るうちに大変な事を聞込んでしまいました。店を出て行く二人の後ろ姿を見送りながら、頭陀袋から手紙を取出して読み直すと、

「——名月の宵、箱根間道太閤道の辻堂にて、非業に相果つる五

或は七の屍しかばねを見る可し、いずれも救い難がたき五惡の輩乍ら末期の引導頼み入るもの也——」と美事みごとな筆跡で書いてあるのです。

女妖白糸のお滝

「ちよいとお待ちなさい、旦那」

「——」

「旦那」

二度まで呼ばれると、山浦丈太郎は静かに立ち止まりました。畑宿を越えて、左へ一と足、箱根笹の凄まじい茂りの中へ分け入ろうとしたところを呼び止められたのです。

「拙者に用事か」

あたり四方を見廻しましたが、人の気配ありません。馴れた箱根道ですが、狐につままれたような心持で、暫くは立ち尽します。しばらく

丁度真昼時分、不思議に人足が絶えて、間道に分け入るのは、今を措おいて機会があらうとは思われません。長い間関所役人をして居た山浦丈太郎は、何も彼も心得て居る癖に、フト不安な心持になりました。

「其処そこに入ると、関所破りになりますよ、御存じですか、旦那」
振り向くと、思いも寄らぬ近々に女の首、草叢くさむらの中から半身を出して、溶け入るように莞爾にっこりするのです。

「心得て居る」

山浦丈太郎は悪びれた色もありません。

「まあ。——尤も^{もつと}、関所の御役人だった旦那が、そんな事を御存じがない筈はありませんわねエ」

「何？」

山浦丈太郎はさすがにギョツとしました。

「それを承知の上で、間道へ踏み込むのは」

「お前は何んだ、——見たことがあるような」

「お忘れになりました」

又ニツコリ、浅黒い顔、美しくもない髪容^{かた}ち、木綿^{もめん}物の地味な衿^{あわせ}を着て居りますが、ニツコリすると、箱根中がカツと、明るくなるような魅力です。

「白糸のお滝^{たき}ではないか」

この素晴らしい笑顔で、山浦丈太郎は漸^{ようや}く思い出したのです。

滝見の茶屋で、愛嬌を売物にして居た、箱根名物のお滝、小田原の家中の若侍が、どんなにこの女一人を話題にして騒いだことでしょう。

それにしても、以前と少しも変らぬ若さと愛嬌は何んとしたことでしよう。三年前のお滝は十九か二十歳に見えましたが、三年後の今近々と顔を合せても、二十歳よりあまり上とは思われません。

「まあ、嬉しいワねエ」

そう言つて又ニツコリする様子は、曾^{かつ}てのお滝より、少しばかり

り物馴れて見えるだけの事です。

「何処^{どこ}へ行くのだ、いきなり藪から顔なんか出して、驚くじやないか」

「藪から棒でなくてよかったです」

「洒落^{しゃれ}を言うな、——俺は少し急ぐことがある」

山浦丈太郎はお滝をかきのけて、箱根笹の藪へ——
杣^{そま}道を辿つて飛込もうとするのです。

「まア、本当に関所破りをなさる積^{つも}り？」

お滝はフイと身を開きました。

「心願の筋があつて、此処^{ここ}に登らなければならぬのだ」

「どんな祟りがあつても」

「くだい」

「箱根関所の元御役人が、何も彼も心得て関所破りをなさると、容易のことでは済みません——命にかけて此処ここを登る御用と言うのは何んでしよう？」

「それを聞いてどうする」

「まあ、そんな怖い顔をなすつて——、私は、あなたのお為を思つて申もうしあ上げるのですよ。悪いことは申しません。黙つて此処ここからお帰りなさいませ、——あなたのお望のぞみは、私が代つて果して上げます」

「俺の望み？　俺の望みは命を捨てに行くのだよ、敵を討たれに行くのだ」

「まア」

「それをお前が代つてくれると言うのか」

山浦丈太郎の頬には、皮肉な微笑が浮ぶのでした。

「たったそれ丈^だけ？　山浦様」

「命を捨てることが、たったそれ丈けというほど手軽か」

「これは？　山浦様」

お滝は帯の間から、錦の守袋を取出して、目の前にチラチラさせるのです。

「あ、それは俺の守り袋だ、いつの間に——」

「ホ、ホホ、麓の茶屋で、これを抜かれたのを御存じなかったのでしょう」

「お前か」

「まア、まア、私が泥棒や巾着切に見えます？」

「外に誰も居なかった筈だが――」

「厄介の貝六という、日本一の厄介な男が、あなたの側でドブ六を呑んで、絡みついて居た筈ではありませんか」

「フーム」

「この守り袋の中に、命と釣替の大事なものが入っていることを御存じでしょう」

「いや、その中には臍の緒書が入って居るだけだ。今死ぬ身に用事のない品、親切気があるなら、そこらの草の中に埋めて人に跨がれぬようにしてくれ」

言い捨てて、山浦丈太郎は箱根笹の中に分け入るのです。

その巖がんじょう 丈てらな後ろ姿を照して、赤々と照る秋の陽、箱根全山

の緑は老いて、何んとなく裏淋しい昼下りの風物でした。

「その臍の緒書きの上を包んだ紙片に御用はありませんか」

「要らない、そんな反古紙ほご——」

「まあ、これが反古紙、何が書いてあるか御存じもない？」

男の気楽さに、お滝も少し呆氣あつけに取られた様子です。

「知らない、もう俺に構うな」

山浦丈太郎は箱根笹を分けて、次第にその深みへ没し去ります。

「何んと云う呑氣のんきな人だろう、——お待ちなさいまし、旦那、山

浦さん、——ね、あなたの力を貸して下されば、この勝負は此方こつち

の勝^{かち}なのに、——ちよいと」

お滝の声も、チラホラ見え初めた旅人の姿に遠慮して、それ切り吞^{のみこ}込む外はなかったのです。その間に山浦丈太郎の姿は、心得切った柚道を、谷の方へ降りて行つた様子、此^{ここ}処からはもう何んにも見えません。

「チエツ、仕様が無いねエ」

龍之助とお染

「お武家様、其^{そこ}処は道が違います。お山見張のお役人衆が、峠の上から遠眼鏡で御覧になって、一応弁解が承り度い、御案内する

ようにとのことで御座います」

言葉は丁寧ですが抜きも差しもならぬ命令です。万田龍之助はお染と顔を見合せてハツと立ち縮すくみました。

関所破りは磔刑が定法、その素振りや計画があつた丈けでも無事には済みません。——そう気が付いた丈けでも、唇が痺れて、頬からサツと血の気の褪ひくのが感ぜられます。

「馴れぬ旅に近道をしたばかりに、道に迷つてこの仕儀、飛とんだところへ踏み入つてござる、敵討つ身に寸刻を争う場所乍ら、一言申開き致そう。御案内を頼み入る」

万田龍之助は長いものに捲まかれる積りで、丁寧に小腰を屈めました。相手は雲助風の汚い半裸体の男、見識も威厳ありません

が、此処ここで争つても仕様がなと思つたのです。

「それじゃ、こうお出いでなせえ」

万田龍之助は、お染を振り返つて「安心して待つてお出いで」と言わぬばかりの瞬まばたきをして見せ、男に従つて、元来た小路を戻りました。

湯元から間道を入つて、谷川を宜い加減さかのぼつた龍之助は、後ろに残したお染のことを気にし乍ら、何処どこともなく導かれて行くのです。「出女入鉄砲」と言われた箱根の関で役人の前へ女を連れて出るのは、山路へ一人残して置くよりも危険だと思つたのでしよう。

「まだかな」

「もう直じきですよ」

山裾を廻る時たった一言交した切り、それから又十二三丁、道は草叢に没して、次第に街道から遠くなる様子です。

「おや？」

気が付いて見ると、何時いつの間にもやら、案内の男が見えなくなつて居るではありませんか。山裾を一つ二つ廻るうちに、何処どこかの小径こみちへ外れてしまったのでしよう。

「案内の方、案内の方」

二三度、その辺を往いつたり戻つたりしましたが、何処どこにも見えません。

「若しや？」

万田龍之助は立ち止って後ろの方を透すかしました。山路に残して来たお染の事を思い浮べると、不気味な戦慄がゾツと背筋を走るのです。

龍之助は咄嗟とつさの間に身を翻すと、元の道を疾風の如く取って返しました。山も木も、岩も見えません。幾度か躓つまずいて、爪先に血が浸み出した様子ですが、そんな事を考えて居るいとま違もないほど、お染がさらわれ、縛られ、さいなまれて居る幻想が、白日の眼の前にチラチラするのです。

「おッ」

万田龍之助は立ち縮すくみました。ツイ先刻、お染が淋しそうに見送って居た、ささやかな空地には、秋草がハタハタとなびくだけ、

あたりくまど
四方を隈取った箱根笹の海に吞まれたか、其処にはお染の影も形もなかつたのです。

道はたつた二本、今龍之助の來たのと丁度反対の方へ伸びて居る杣道を、滅茶滅茶に駆けました。時々大きい声で「お染」と呼び度い衝動に悩まされ乍ら、犇ひしと唇を挟むんで――。

がそれは全く無駄な努力でした。何処どこまで行つても箱根笹の海で、その間を縫う杣道は、からかつたように、ヒョックリ元の場合へ龍之助を導いて來るのです。

四半刻ばかり、傷ついた獣のように駆け廻つた龍之助は、ハツと、草地の上に膝を突きました。

「あ」

赤い、燃え立つような扱帯しごきが、長々と草叢の中を這つて居るではありませんか。

絞りの麻の葉も、龍之助に取つては忘れようのないものです。紛れもないお染の品——と思うと、ツイ抱き締めるように立上たちあがりました。お染は此処ここを通つて、何処どこへ行つたことでしよう。

途方に暮れて、暫く立止つていると、サラサラと耳に爽やかな水の音が聴えます。龍之助はそれを聞くと、恐ろしい渴きに、喉ただが爛れるようになって居ることに気づきました。

這い寄つて見ると、崖の上から落ちる一筋の山清水へ、誰が架けたか、青竹の樋とが仕掛けてあつて絹のような流れがチヨロチヨロと下へ落ちて居るではありませんか。

手で掬^{むす}んで一口、二た口^ふ、三口目は少し苦いように思いました。が、構わずに五口、六口と呑んで、ホツと息をつくとき、

「あッ」

くらくらと眩暈^{めまい}がして、思わず草叢の上へ腰が落ちます。

ジーンと鳴いて行く秋の蟬、——側腹のあたりに、龍胆^{りんどう}と梅

鉢草が咲いているな——と思った切り龍之助は正気を喪^{うしな}つてしまいました。

蔭から糸を引く者

やや暫く経つと、同じ清水の傍に、山浦丈太郎が差かかりまし

た。

山路は馴れた強健な足取りですが、秋の陽に照り付けられて、さすがに喉が渴いたものか、水の音を聞くと、吸い寄せられたように、岩清水の下に腰をおろしたのです。

山馴れのした丈太郎は、直ぐ側にある^{ふき}露の葉を一枚取って、裏表を透して汚れのないのを確かめると、器用に曲げて、盃を作りました。樋の下へそれを差出して、チヨロチヨロと溜る水を享樂する風情でしたが、一杯になると頤の方を持って行って、ガブリと一口、

「――」

首を曲げて、プーツと吐き出しました。

「あいや、御武家」

後ろから声を掛けられると、

「拙者か」

ギョツとし乍ら、悪びれた色もなく振り返ります。

「その水を呑んではなりません」

六十近い雲水の僧、何時いつの間にやら飛付いて山浦丈太郎の腕を止めて居るのです。

「御僧、なぜお止めなさる」

「その清水には、毒が投じてござるぞ」

「えッ」

「現にツイ今しがた、その水を呑んで毒に中あてられ、重態に陥つ

た旅人がござる。幸い愚僧が通り合せ、木蔭に抱き入れて介抱いたしたが、まだ正氣が付かぬところへ、又もや人の氣配、驚いて飛んで参ると、御貴殿がその水を呑もうとして居られる」

かたじ
「忝けない」

「病人はその木蔭に寝かせて置いたが、愚僧一人では何んとしても手が及ばない。貴殿も暫く看護みまもつて下さらぬか」

「心得申した」

指さす一と叢の木立の中へ、

「御僧、病人は何処どこで御座る」

「それ、その木の下」

二人は大きな日影を作る木の下へ入りました。が、差覗くまで

もなく、其処そこには何んにも見えません。

「あッ」

「どうなされた御僧」

「確かに此処ここに寝かして置いた筈だが、ハテ、不思議」

「どんな方？」

「十七八の、まだ前髪立の若い武家で」

「フーム」

山浦丈太郎は妙に思い当ります。箱根の間道へ、今日に限ってわけ登る十七八の若い武家、それが自分を敵と覗うかがう、万田龍之助でない誰が保証するでしょう。

丁度その時、其処そこから少し離れた草叢の中、大きな断崖を一つ

隔てたところに、正体も無い万田龍之助を寝かして、頻りに介抱しきしている女がありました。

「お滝さん、ヘツヘツヘツ、うまくやっているぜ」

「あッ——けえ六親分かい、おどかしちやいけない、そんなところへ、汚ない面なんか出して」

「汚い面は御挨拶だね」

「こんなところへおびき出して、この若いのを締めたのはお前さ
んだろう」

白糸のお滝は、美しい顔を挙げて、押っ冠かぶせるように極きめつけ
ました。

「冗談だろう、その武家をおびき出したのは俺だが、締めたのは

俺じゃねえ」

「はてね」

「雌の方を知ってるかい、お滝さん」

「知らないよ」

「はてね」

厄介の貝六も仔細らしく雁首を曲げました。

「こいつは油断が出来ないよ。手柄争いは私と親分達ばかりじゃない。蔭にもっと凄いのが居て、恐ろしい事を企らんで居るに違いない」

「――」

「私も、赤崎さんも、お前さんも、その糸で操られて、銘々一番

賢い積りで見得を切つて居るのさ」

「誰だい、その糸を引いてる野郎は」

「判らない、少しも判らないから口惜くやしいじゃないか」

お滝はそう言つて二子山ふたごやまのあたりを仰ぎました。もう傾きか

けた陽、約束の八月十五日の日没へ一刻半ともありません。

お染の災難

「お女中、待たれい」

恐ろしく錆の乗った声、お染そめはハツと立ち竦すくみました。

「ハ、ハイ」

「何処へ行かれる、——此処は箱根の裏道、女人の身で押し通ると、磔刑柱を背負わされるが承知かな」

五十日月代、腐った羽二重、朱鞘を落して、麻裏草履を浅まし
く突っかけた姿は、言う迄もなく浪人者赤崎才市です。

「——」

お染は何んと言つて宜いか解りませんでした。伴の万田龍之助が、雲助風の変な男に連れて行かれてから、幻に誘われるような心持で、山から山へ、谷から谷へ、幾里さ迷い歩いたことでしょう。フと気が付いた時は、とある屏風岩の下に崩折れて、無気味な浪人者にマジマジと見おろされて居たのでした。

「ところで、お前のつれの若侍——万田龍之助とか言つたな、——」

「あの男は首尾よく罨に落ちてしまったよ」

「えッ——敵は、敵討は？」

「何を隠そう、俺がその敵だ」

「山浦丈太郎？」

「そうだ、山浦丈太郎とはこの俺のことだ。今では、万田龍之助を生かそうと殺そうと俺の心持一つだ」

「——」

ヌケヌケとこんな事を言つてのける、赤崎才市の掛引かけひき沢山たくさんな言葉に圧倒されて、お染は唯ただもう轉倒てんとうするばかり。

「あんな小僧ひねを捻つても大した誉れにもなるまい、返り討は日延べとして、随分助けてやらないものでもないが——」

「助けて下さい、あの人を、お願いだから助けて下さい」

お染は後前の分別ありませんでした。万田龍之助が助かることなら、どんな犠牲でも忍んだことでしょう。

「随分助けてやらないものでもないが、それには望みがある」

「？」

「お前の持っている肌守の中に、蜘蛛の巣のようなものを書いた、
絵図面の切れがある筈だ。はずそれを渡して貰おうか」

「――」

「どうだ、お易い事ではないか、その絵図面一つで、お前の許いいな
婚ずけが助かるのだ」

「でも、これは母さんが、誰にも見せてはならないと――」

お染は犇^{ひし}と胸を抱くのです。

「よしよし其^{そこ}処に隠してあると言うのか、——見せて悪いものなら、眼をつぶつて受^{うけと}取ろう、どうだ、これでは？」

赤崎才市は子供をからかう調子で、眼までつぶつて見せるのです。

「いえいえこれは」

お染は懷を抱いたまま、後に断崖が口を開いて居ることも忘れて、ジリジリと下るのです。

「さてもしづとい」

赤崎才市は、長いのをガラリと抜きました。鞘は大禿^はげちよろですが、中味は思いの外物凄く、夕陽を受けて、焼金のようにギ

ラギラと光ります。

「あれッ」

お染はもう一步退きました。

「危ないッ、後は谷だ、——この刀の方が、まだしも極楽だぞ」
ニヤリと笑う笑いがコビリ付いて、赤崎才市の苦渋な顔に、残酷な悪相がパツと拡がります。

「あれーッ」

町娘のお染は他愛ありませんでした。

前後の分別もなく、脅かされた鳥のようにパツと起おきあが上つて、

麓の方へ——、

「待て待て、聴きわけのない女だ」

赤崎才市の手が伸びると、お染の帯際を取ってグイと引戻しひきもどしました。パツと燃ゆる紅の裳もすそ、夕陽が紅葉に反映して、才市の血を好む心をいら立たせます。

「ヒ、人、人殺しッ」

「馬鹿奴めッ、本街道は近い」

「た助けて——ッ」

若い最高音を本街道が近いと聴くと、手加減もなく張り上げるのです。

「えッ、面倒、俺を怨むなッ」

赤崎才市は小手を振りました。紫電一閃、お染は飛び散る血潮の中に、声もなく崩折れます。

赤崎才市は血振いをして一刀を鞘に納め、娘の死骸を引起して、帯の間を搜さがりました。

「無い」

振り上げた顔、疑惑と失望に歪んだ小鬢こびんのあたりを、シュツとかすった物があります。間髪を容れずに、ダーンと木精こだまを返して鉄砲の音、

「あッ」

顔をかすめて、プーンと焰硝が匂うのです。

「驚いたか、御浪人」

近々と高鳴る若い声、振り仰ぐとツイ頭の上、二十尺ばかりの屏風岩の上に、短筒を片手だめしにして、十三四——とも見える

少年が笑って居るではありませんか。

「何者ツ？」

赤崎才市はカツと眼を剥きました。

「箱根近くに住んで俺を知らなきやもぐりだよ。大磯へ変な手紙を持って行ってやったじゃないか」

「あッ、あの小僧か」

いづぞや厄介の貝かいろうく六と赤崎才市へ、変な手紙を持って来た小

僧は、この小柄なくせに妙にませた憎にくてい体なくせに何処どこか可愛らしい小僧だったことを思い出しました。

「箱根の海道かいどうまる丸てんだ、——覚えて置いて貰おうか」

「何を小僧奴め」

「怒ると上から小便をひっかけるよ、ハッハッハッ、驚いたろう、あわてて逃げたって駄目だよ」

「己れッ」

「そんな女の懐なんか搜ると、鉄砲が物を言うぜ、見るが宜い、南蛮の短筒だ、——その女は、こんな結構なものを持っているくせに、使うことを知らなかったんだ」

「馬鹿奴^めッ」

「俺は鉄砲の撃ちよう位は知ってるぜ。今のは小手調べさ、小鬘をちよいとかすって、傷をつけないところが手際だろう、本当に撃つ気なら、眼玉でも鼻の穴でも喉仏でも、望み次第に撃ち貫いてやる——屏風岩の根を廻って来ようなんて駄目さ、大きな声を

張り上げりや、畑宿まで筒抜けだ、ものの百も数えぬうちに、お役人が五六十飛んで来るよ、今の鉄砲の音で、宜い加減驚いてるんだもの」

「――」

「驚いたか御浪人、尻尾を捲まいて引揚げの方が無事だぜ」

海道丸の啖たんか呵は虹のようでした。柄も顔も十三四ですが、言うことを聴いて居ると、全くすれっからした大人です。手織木綿もめんの半裸、縄の帯、膝あしがらつ小僧を出して、馬の草鞋わらじのようなでっかい草鞋をはいて、足柄山あしがらやまの金太郎を世話に崩したような少年のくせに、何なんと言う恐しい口でしょう。

赤崎才市は黙って引揚げました。お染の懷に、狙った密書が無

いとなると、この上小僧をからかつて、つまらない破綻を招くのは、いかにも馬鹿氣て居ります。

貝六の睨み

「大層な勢いじゃないの」

後から柔かい声、

「あ、姐御か、何時いつの間に来て居たんだ」

振り返った海道丸の鼻の先へ、近々と白糸のお滝たきの肌が薰じます。

「鉄砲の音に驚いて来て見たのさ、でも危ないネエ、そんなもの

を玩具おもちゃにしちや」

「大丈夫さ、弾丸たまなんかありやしないもの」

「まア」

「たった一つ入って居たんだよ、そいつが外れて、あの浪人野郎の鬢の毛を少し撈むしっただけなんだ、——こんな鉄砲なんか、鳥脅かしにもならないや」

「あッ」

お滝が止める間もありません。海道丸の手があがると、短筒は大きく弧を描いて、千仞の谷底へ放り込まれたのです。

「清々せいせいして宜いやな、——ところで、姐御に頼まれたものを二

枚」

海道丸は腹掛を探つて、二枚の絵図面の切れを取出し、皺を伸すように岩の上に並べるのでした。

「まア、何うして手に入つたの？」

「一枚は、毒に中てられてウンウン言つて居る若いお武家の懷から抜いたのさ」

「まア、お前だつたのかい」

「一枚はその女が夢中になつて、巾着を落して行くから、後をつけて行つて拾つたんだよ。それから、山浦とかいう武家から抜いてやつたのと、姐御が自分で持っているのを勘定すると丁度四枚だろう、あと三枚——」

海道丸は小さい掌を出して指を折るのです。

「まア、いやにゆきとど行届くんだね」

お滝も少し呆あつけ氣に取られました。

「いやに物驚きをするぜ、尤もつとも姐御がそうやって、まア、まア――

――と眼を一杯に見開いたところは馬鹿に可愛らしいんだが」

「まア、呆れたよ、この子は」

「精せいぜい々呆れているが宜い、あとの三枚を持って来て、立て続け

にそのまアマアって奴を聴かして貰うぜ」

「――」

お滝も口がきけなくなりました。

「もう陽が落ちるぜ、辻堂の前へ行つて待つてゐるが宜いや、あば

よ」

ヒラリと身を翻すと、屏風岩から一足飛とびに降りて、あつと言う間もなく、小僧の影は杣道そまみちに消えました。

「姐御、甘くやって居るぜ」

「誰だい」

「貝の字」

入れ代って、ノソリと立ったのは、厄介の貝六の半裸体、自分の鼻を指してニヤリニヤリと笑うのです。

「貝の字も無いものだ、臭いよ、風上からじゃ、お目通りは叶わないよ」

お滝は以ての外ほかの見幕です。

「いやにツンツンするじゃ無えか、贅ぜいは言わない、あの小僧に振ふ

舞^{るま}った半分も笑顔を拝ましてくんねエ」

厄介の貝六はそんな事を言い乍^{なが}ら、蟲^{むしく}喰い頭と大きな鼻を、心持前へ突出^{つきだ}しました。

「お前さんにはお職過ぎるよ、——退^どいておくれ」

「此^{ここ}処は箱根の裏道だぜ、お滝、あんまり増長すると——」

「脅かす気かい、お止^よしよ、白糸のお滝には棘があるよ」

「その棘にさされて見^みたいよ、飛^とんだ逆^{のぼ}上^せ引^ひ下^きだ」

お滝は袖を楯にして、さすがに一步退きました。

「口説きも何^どうもしねえ、安心して話を聴くが宜い、——な、おい、今あの小僧から受取ったのとその帯の間にあるのと、合せて四枚の絵図面、そいつを吐き出して貰おうじゃないか——」

「」

「ね、姐御、いやさお滝さん、七万両の小判を一人占めにしよう
たつて、そうは行かねえ。素直にその四枚を投げ出しや、俺もあ
との三枚は工面するよ、物は相談だ。どうだい」

貝六は大きな手を頤の上に泳がせて、ジリジリとにじり寄るの
です。

「あとの三枚がお前の手にあると言うのかい」

「今は無い、が、持つてる奴は俺の外に二人、皆んな当りが付い
ているんだ。七枚集らなきや読めない判じものなら、二人持寄つ
て、七万両を手に入れる外はあるめえ、たと欲しいとは言わね
え、三枚持つて分配は三万両、どうだい姐御」

貝六はひどく下手に出ました。赤崎才市が口ほどにもなく働きの無いのに比べて、お滝は海道丸少年を手先に使つて、半日の間に四枚の絵図面を集めた手際の素晴らしさに面喰つたのです。

「御免蒙こうむろうよ、お前さんが当てにしている三枚も、いずれは私の手に入るんだから」

「何を？」

「怒つたつて駄目だよ、しっかりふんどし禪の三つへでも入れて暖めて置くが宜い、お前さんのが一番先に貰うことにして居るから」

「何をッ」

厄介の貝六も一向睨みがききません。お滝の舌に翻弄されて、掴みかかるほどの勇氣もなく、スゴスゴと引揚げてしまいました。

龍之助と名乗る男

「あれが太閤道の辻堂で御座ろうな」

旅の雲水空くうぜん善は頭の上を振り仰ぎました。巍峨ぎがたる路の果、

本街道から木立と山の背に隠れて、ささやかな辻堂が、岩の上に建つて居るのでした。

「左様、此処ここまで来ればもう大丈夫、失礼乍ら御坊はこれにてお待ち下さらぬか」

山浦丈太郎じょうたろうは、敵討たれの場所へ、仏弟子をつれて行くことの不穩当さを思つて居る様子です。

「どうしても行かれるか」

「いかにも」

「今宵、名月の光に照されて、太閤道の辻堂の前に、五、或^{あるい}は七の死骸を見るべしと予想したもののござるが」

旅の僧が丈太郎の袂^{たもと}を押えました。

「左様^{さよう}なことも御座ろうか」

「そこで、御武家の面体には、不祥な事を申すようだが、明かに死相が——」

「敵討たれに行く拙者、死相は当然のことで御座る。武士に取つては、誉れの吉相」

「何んと言われる、敵討たれ？」

雲水空善は、丈太郎の言葉の意外さに、押えた袂を離して、正面に廻りました。

「今から三年前、この箱根関所役人として、朋輩万田某を斬つて立退いたこの山浦丈太郎を斬るには斬るだけの理由があつたが、^{たちの}左様なことは孝子の志を妨げる口実にはなるまい、万田某の子龍之助、当年十八歳に相成るのが、八月十五日夜の月の出潮を合図に、あの辻堂にて親の敵が討ちたいと申す、——この上申^{もうしあ}上げることは御座らぬ、武士の最後、お妨げ下さるな」

山浦丈太郎は雲水をかき退けるように、ツイと出るのです。物ごしの静かさ、恰幅の見事さ、人柄の上品さ、雲水空善は、長大息して、この死に行く武士を見送るばかりです。

「武門の意地とあらば、最早お止め申さぬ、御片付けは出家の役、いずれ骨を拾つて進ぜましょう、南無」

空善は法衣の袖を合せて何やら念ずるのです。

「さらば、頼み入る」

一礼して山浦丈太郎は、箱根に馴れて健やかな足取り、果し合
いの場に臨むたしなみには無いことですが、岩を踏み越えて、一
気に辻堂の方へ登ります。

が、辻堂の前にたどり着いた丈太郎は、まだ誰も来て居ない事
に気が付くと、捨石に腰をおろして、暮れ行く相模灘さがみなだを眺めや
りました。黄金色こがねいろの夕陽を浴びた山々、その先に碧を湛たえた海、
すべてが此世このよとも覚えぬ美しさの裏に、次第に明るさを失つて、

東の空から、薄紫の夕陽を破って、大きな名月が、ツ、ツ、ツと豊かな姿を現わすのです。

「山浦丈太郎、よくぞ参ったな」

辻堂の後、夕闇を染め出した中から、ヌツと出て来た男の顔は、覚悟を決めて居た山浦丈太郎を驚かすに充分でした。

「貴殿は？」

「万田龍之助——不俱戴天の親の敵、覚えたか」

「何？ 貴公が万田龍之助」

「いかにも」

五十日月代、腐った羽二重、禿ちよろの朱鞘、長刀になった麻裏を突っかけた、三十五六の万田龍之助があつて宜いものでしょ

うか。

「万田龍之助氏は、拙者はまだ対顔しないが、十八九の前髪立の美少年と聞いたが——」

「いや、ツイこの間まで若衆であつたよ、前髪を落して急に老けて、こんなに小汚なくなつたが喃^{のう}——」

ヌケヌケと青髭の跡をさすつて笑う不敵さ、

「何んと言う」

「いつまでこの顔を眺めて居ても、老けたものは若くはならぬが、拙者は正に万田龍之助、親の敵だツ、来いツ」

ギリリと抜いた一刀、万田龍之助と名乗る赤崎才市は、片手上段に振り冠^{かぶ}つて、ニヤリと笑うのです。

「意趣を言えッ、次第によつては、相手になろう」

「親の敵——で悪ければ兄の敵、それで氣に入らなきや朋輩の敵だ。怯れたか山浦」

「それ程に言うなら相手になろう」

山浦丈太郎は相手の顔色から、兇惡な企^{たく}らみを読んで取ると、心にうなずいて一刀を引抜きました。

「いよいよ抜いたな」

「応^{おう}ッ」

「行くぞッ」

刃の切先と切先が噛み合いました。夕映と月明りとが、中空に入れ代る淡藍色の大氣の中に、二条の毒蛇は、伸び、縮み、絡み

合い、死闘の一瞬を享樂しているのです。

その後から、ヒヨイと首を出した厄介の貝六、岩を小盾に何方どっちに味方をしたものか——フト迷った様子です。が、丁度山浦丈太郎の背が、自分の前へ無防御のままに曝さらされると、ツイと小石を拾つて、丈太郎の項うなじを狙いました。

それが急所を外れたにしても、小鬢こびんや頬をかすつただけでも、丈太郎の構えに破れが出来て、赤崎才市の邪剣に付け入られるでしょう。

あわや、——真に危機一髪という時でした。

「あッ」

何処どこから伸びたか、藤蔓こしらで拵えた粗末な投げ罠、貝六の首にパ

ツと絡まると、夕闇の中へ、グイと引きまします。足元は五六十尺の谷の口、ひとたまりもなく貝六の図体は、崩るる小石と共に、その中に落込んでしまいました。後を静かに塗り潰すのは、音もなく襲い来る夕闇。

七枚の絵図面

山浦丈太郎と赤崎才市の果し合いは、暫く続きました。二人とも薄傷を負ったらしく、山浦丈太郎はわけでも、頬や腕のあたりにかすり傷を受けましたが、蘇芳を浴びたようになり乍ら、氣力を励まして、必死と切り結びます。

「待った」

誰やら、谷底から這い上る気合、

「その勝負待った」

喘ぎ喘ぎ、^{あえ}剣戟の中へ割り込んだのは、瀕死の少年を肩にかけた雲水空善でした。

「お、御坊」

一步下った山浦丈太郎、それへ噛んで含めるように、

「暫く、その勝負の相手は、これなる若いお武家でござる、まことの万田龍之助殿は、この仁でござる」

空善は月の中に、死に行く少年武士の顔を曝して見せるのです。ドキリとした様子で、少年を避けた赤崎才市、それがうっかり、

山浦丈太郎の身近だった事には気が付きません。

「騙^{かた}り者奴^めツ」

踏み込んだ丈太郎の一刀、赤崎才市を袈裟掛に切って落しました。

「万田殿」

空善は、心せわしく少年武士を抱え上げます。

「いざ、この首を進上しよう。本懐を遂げられい」

山浦丈太郎は一刀の血ぶるいをして、雲水の腕の中の少年武士を覗くのです。

「もう息が無い、一念の力で、瀕死の身を辻堂近く這い上ったのを、幸い拙僧が夕闇の中に見付け此^{ここ}処まで担ぎ上げて進ぜたが」

「
空善は龍之助の月光にカツと見開いた眼を閉してやり乍ら、感慨深く言うのです。」

「道々、苦しい息の下から、素性を打ち明け、敵討つために辻堂へ——と繰り返して言われたが——南無」

空善は涙を念仏に紛らせました。月明りに浄化された万田龍之助の死顔は、この上もなく浄らかに見えたのです。

「敵の顔も見ずに——不憫な」

山浦丈太郎も裏淋しい心持でした。

「何事も約束でござるよ、——討ち兼ねるのは、討ち兼ねるだけの仔細があるう」

「生きて、も一度下界へ還る望みは無い。死出三途の道づれは、この山浦丈太郎が——」

ハツと思う間に、丈太郎は血刀を逆手に取直して居りました。

「ま、待つて、山、山浦様」

轉ころがるように飛出したのは、白糸のお滝でした。矢庭に丈太郎の刀持つ手にすぎると、

「私も、私も殺して下さい、——この細工をしたのは皆んなこの私、——さる人から聴いた七万両の謎、六本の手紙を書いて、皆んな此ここ処に集めたのは、この白糸のお滝の仕業しわざでした。七万両の小判を私の手に握つて、——三年目で山浦様に逢いたさ」

「——」

恋と慾との両天秤で、お滝は此大芝居を書いたのです。その
氣違い染みた述懐はまだ続きます。

「大久保石見守の子孫が七人、それぞれ祖先からの言い伝えで、
七万両の事は知ってる筈、でも、その七人の居る場所が判らな
かった、——幸い私に教えてくれる人があつて、六人六様の手紙を
書くと、案に違^{たが}わず皆んな集まつて来ました。その六人から六様
の絵図面を巻き上げ、私の持つて居るのを加えて七万両の隠し場
所を捜し出し、——」

がくりと俯向^{うつむ}くお滝、さすがに後は言い兼ねた様子です。

「山浦氏一人を助け、この山を脱^ぬけ出す積^{つも}りであつたなつ、毒婦、
毒婦」

雲水空善は、珠数をあげてサツと空を払います。

「それに違いはありませんが、山浦様は私如きに目もくれません、それから七万両の金にも、——そして敵を討たれて死ぬ事ばかり考えて来ました」

「三四人の命を虫けらのように断つ女に、山浦氏が目をかけようか、げめんによぼさつ外面如菩薩」

「いえいえ違います、私はいかにも絵図面を手に入れました、が、一人も人を害めた覚えはありませんあや」

「何？」

お滝の言葉は予想外でした。

「四人の人は誰かに殺され、絵図面は独りでに私の手に集ったの

です。この通り」

お滝は帯の間から、六枚の絵図面を出して、石の上に並べました。月明りが便り^{たよ}ですが、六枚は今剪^きったもののようにピタリと合つて、真ん中のが一枚だけ欠けて居るのです。

「その一枚はこれだ」

雲水空善が、懷から出した一枚の絵図面を真ん中に置くと、絵柄はピタリと合つて、嫌^{いや}応^{おう}もなく三人の眼を吸い寄せます。

骸骨と黄金

「これが辻堂だ」

山浦丈太郎は初めて口を開きました。美濃紙一枚ほどの絵図面が、退引のきひきさせず見る人の注意を引き摺って行くのです。

「これが辻堂の後の筍 岩たけのこいわだ」

と空善の指は絵図面を這います。

「——（仲秋望の夜戌いぬの刻、石筍の影地に落つるところ）——とある」

「此方こちらには——（戌亥いぬいに五歩、丑寅うしとらに七歩、石猿を叩いて道自ら開くべし）——とある」

「御坊」

「山浦氏、素もとより不浄の宝だが、大久保石見守の血を引く我々を此処ここまで導いた上は、この儘ままにもいたし難がたい。祖父の罪を償うた

め、隠したものは世に出し、闇の中のものは天日に曝して、その所を得せしむるのが道で御座ろうか」

空善は寒々と袖をかき合せるのです。

「参ろう、御坊」

「お滝も来るが宜い」

二つの死骸に羽織をかけて片手拝みに、三人は辻堂の後に廻りました。時刻も丁度戌刻、筍岩の影の落ちたあたり、わざわざ敷いたらしい一枚石の上から、示された通りの足数を辿ると、道はハタと屏風岩に衝き当ります。

「お、三猿が刻んである——苔がひどいから、一寸^{ちよつと}解らないが」

空善は屏風岩の正面の苔を払って、ほのかに見える三猿を指さ

しました。あまりの薄彫りで、昼の強い光線の下では、却って紛れて見えなかったかも知れません。

「叩いて見ましょうか」

と丈太郎。

「いや、叩くのは言葉の綾だろう、押して見られるが宜い」

「斯う」

山浦丈太郎は肩を三猿に当てて、ウーンと押しました。薄傷なうすでがら数ヶ所の手傷を受けて居るせいかなかなか思うような力が出ない様子です。

とみ斯う見して居た空善は、ハタと膝を叩きました。

「唯押ただけではいけない、この岩は一枚扉になっているが、

龕がんどう灯返しきこりの仕掛けだ、だが、樵夫や狩人に触られて、扉が開いては何んにもならない。唯触った位では開かぬように、この通り岩扉の根にゴロタ石が積んである」

雲水空善は、早くも扉の仕掛けを見破ったものか、三猿を彫きざんだ大岩の前に積み重ねた、ひと抱えほどの岩を幾つも幾つも取除きました。

「これでよし」

と言った時は、三猿の岩はその根のあたりに、少しばかりの隙間さえも見せて、明かに龕灯返しきこりの一枚扉ということが解ります。「どれ」

山浦丈太郎が立って、三猿の左の方、何んにも彫きざんでないところ

ろを押すと、岩はキシミながら動いて、人間がようや漸く通れるほどの口を開けました。頭の上からは、バラバラと散る小石、土くれ、苔かたまの塊り。

「灯が欲しいな」

空善は真つ暗な空を覗きながら言いました。

「今頃ここ此处で火を点けて、遠方からでも関所役人に見付けられるとうるさい。中へ入って工夫をしましょう。幸い火打道具の用意はある」

山浦丈太郎は何んの恐れ気もなく、穴の中へズイと入りました。続いてお滝、最後は空善。

入口に背を向けて、丈太郎は早くも火打鎌を鳴らします。その

頃の武家のたしなみで、火打袋と懷中蠟燭ろうそくは持つて居たのです。心細い灯ながら、それでも四方あたりの様子だけは臃ろおぼ氣に判ります。多分火山岩の堆積の間に出来た自然の風穴を利用して、その口を塞ふさいだものでしょう。中の空氣なども、冷ひやりとして思いの外に爽やかです。

「お」

真つ先に立つた山浦丈太郎が、凝ぎようぜん然として立止りました。

「何んじやな」

後から差さしのぞく空善の眼に映つたのは、白々と晒さられた骸骨——
しかもボロボロの着物を着け、刀を抱えて悠然と何やらに凭もたれて
居るではありませんか。

「あッ」

お滝はさすがに悲鳴をあげました。が、次の瞬間、骸骨の凭れて居るのは、幾十とも知れぬ千両箱のうちの一つで、その箱も大方腐って釘が緩んだものか、一方の隅から、吹き立てのように見える小判が、ゾクゾクとハミ出して居ることが判りました。

「あ、灯が尽きた」

山浦丈太郎は、燃え残る懷中蠟燭を捨てました。細い紐のようになつた懷中蠟燭が、今まで燃えて居たのが不思議な位です。

「右の棚——石の凹みの中に、蠟燭がある、百年前のものかも知れないが」

空善は早くもそんな事まで気をくばって居たのでしよう。丈太

郎は大急ぎで手を伸のばすと、石の凹みにあつた二三本の白いものを掴み、まだ足元の岩の上で燃えて居る懷中蠟燭から、灯を移しました。

百年前の蠟燭が首尾よく燃えたと、パツと一時に眼界が開けて、半ば腐つた千両箱——三四十もあるうと思うのが、目に入ります。「先まず考えよう、いろいろの罪を作つて、百年間眠ねむりつた黄金だ、百年間の眠ねむりから醒めるだけでも、もう四人の生命を犠牲にして居る、この先、幾人の血を吸う事か——」

空善は冷たい岩に腰をおろして、こんな事を言うのです。

百年越の怨

「ハツハツハツハツハツ」

不気味な笑いが、何処どこからともなく響きます。三人はお互の顔を振り返って見ましたが、空善も丈太郎も、お滝も、笑うどころの沙汰ではありません。

「此処ここだよ、解らないのかえ、間拔だなア」

お滝にはわけでも聴ききおぼ覚えのある声です。フト天井を振り仰ぐと、二丈ばかり上、岩と岩との隙間から青白い月の光が洩れて、その月の光の中に、面白そうに少年の顔が笑って居るではありませんか。

「まア、海道丸」

お滝の声には救われた喜びが響きました。こんな陰惨な空気の中で、悪戯いたずらつ児こで横着者だった海道丸に逢うのは、決してイヤな事ではなかったのです。

「安くして貰うまいよ、姐御」

「えッ」

「海道丸には相違ないが、もうお滝姐さんの子分や手下じゃない——相対ずくで物を言うぜ、え、おい、三人」

海道丸の顔には、不思議に威圧的なところがありました。月の光のせいかな、可愛らしい顔が妙に硬張こわばって、表情にも、調子にも、少年らしさなどはもう微塵ありません。

「何を言うんだえ、海道丸」

「フ、フン、まだ気が付かないのかえ、こんな芝居を打ったのは、姐御は自分だと思つて居るだろうが、よく考えて御覧、大久保石見守の子孫が、百年後にどうして居るか、一々教えてやったのはこの俺じゃないか」

「——」

「六本の手紙だつて、姐御が書いたに違いないが、文句は皆んな俺が教えてやつたろう、——その坊さんに、今晚此処で、五人か七人の人間が死ぬと言つてやったのも俺だ」

「お前は——」

「黙つて聴いておくれ、七人此処へ集めたのも俺なら、七人のうち、若侍の万田龍之助と、厄介の貝六を殺したのも俺だよ、——」

お染を才市に殺さしたのも、才市をその丈太郎に斬らせたのも、俺の筋書の一つだったんだ」

「海——」

あまりの事にお滝は立上って手を振りました。月光に半面を照された海道丸の顔は、悪魔的で高慢で、もう先刻までの倨おもかげもありません。

「第一俺は十三や十四じゃ無えんだぜ、百年越の怨うらみを酬はらすように、餓鬼のうちから吹込ふきこまれて、根性曲りに育てられたから、一向身か体は伸びないが、それでも取って十九よ、いい若い者だよ」

一瞬淋しそうな苦笑いが、海道丸の頬をよぎります。

「お前は誰だ」

雲水空善は一喝をくれました。

「早くそれに気が付きやよかつたんだよ、坊さんはさすがに智慧がありそうだ、——考えて見るが宜い、大久保石見守の子孫、七家の人間を百年も見張って、敵を討つ折を狙って居るのは、一体誰だと思ふんだ」

「——」

「解らないのか、その骸骨の五代目の孫だよ」

「それじゃ、話に聴く石坂左門次の——」

空善は、何んとなく、ぞつとしました。丈太郎もお滝も、あまりの事に、口もきけません。

「その通り、此処^{ここ}へ七万両の金を隠してやったばかりに、此穴の

中で、大久保石見守に殺された、石坂左門次の孫の子の子だ、——石坂左門次の配偶は、この怨を忘れないように、代々子から子に言い伝えて、大久保家の子孫七人の身の上を調べ抜き、百年目の俺の代になって漸く望を遂げたのだ」

「——」

「お滝姐さんは賢^{かし}こいようでも人が好いから、俺の考え通りに仕事を運んでくれた。この山におびき寄せて、七人が互に殺し合うように仕向け、あとで七万両を俺がさらって行く積りさ——、七枚の絵図面が無きや、俺だつてこの穴は解らない、だから、お滝姐御のところに絵図面を集めてやって、その坊主に絵解きをさせただ、——穴の入口を開けるのは難しいが、穴の天井には、息

抜の小さい穴があると言ひ伝えられて居るから、お前達が此処へ入るのを見定めると、俺は外から廻つて息抜を搜したんだ、四辺が暗いもの、足の下から灯が射すところを搜し出すのは、わけの無い仕事だぜ——どっこい、飛び付こうたつて無理だ、下から此処まで三間以上ある上、岩の出来が馬鹿に頑丈だ」

海道丸の言い草は冷酷で高慢でした。

「己れツ」

我慢のなり兼ねた山浦丈太郎、入口から飛び出そうとしましたが、何時の間にやら龕灯返しは外から鎖して、岩の扉の外に、先刻の石をすっかり積んでしまつた様子です。

「ハツハツハツ。駄目だよ、其処から外へ出られるものか、三十

人ぐらいかかって、三日も押したら開くかも知れないが――」
海道丸は、顔を歪めて面白そうに笑うのです。

恐ろしい結末

「十日も放って置くと、三人共餓死するよ、それが嫌なら、一つだけ助かる工夫を教えてやろう」

「――」

あれからもう一刻位は経ったのでしよう。天井から吐き散らす、呪いの言葉も大方尽きて、深くなり行く夜だけが、穴から射し込む月光の角度でハッキリ読めます。

「俺は、先祖の百年目の命日に、此処ここで七人の命をとる事に決めたが、三人の餓死するのを待っているのも馬鹿馬鹿しい。斯こうしようじゃないか」

「――」

「三人のうち、一番最後まで生き残ったのを一人助けてやろう――餓死するのを待って居ちやつまらない、二人を殺したのが助かる事にするんだ。三人でお互に殺し合うんだよ、素晴らしい観物だぜ。大久保石見守の子孫には、丁度宜い仕事だ」

「――」

「どうだい、――一番強そうな山浦丈太郎は、二人をやっ付けて、助けられる気は無いかえ」

「馬鹿奴^めツ」

丈太郎の怒^{いかり}は爆発しました。一喝と共に、落ち散る小判を拾つて、パツ、と投げましたが、ヒョイと顔を引つ込めてその手には乗りません。

「フ、フ、やるぜ、でも、そんな事をしても無駄さ、姐御はどうだい、その武家と坊主を締める気はないのかえ」

お滝は悲しそうに上を見やるばかりです。

「坊主でも宜いよ、こいつは見物だぜ」

空善も黙つて袖をかき合せました。

「二人を退治した者に、その七万両の金の半分をやるとしたらどうだ」

「――」

「えッ、免倒臭い、めんどう七万両皆んなやつちまえ、こいつは少し高

い木戸銭だが――」

悪魔の顔は又笑います。

「小僧、黙らぬかッ」

丈太郎はたまりかねて叱咤しましたが、それは併し、しか何程の威嚇にもなりません。

「怒ったか、お武家、それなら頼まない、三人一緒に退治してやる。――気が付くまいが、此天井には仕掛があるんだ、七万両を盗みに入る者のあつた時、そいつをひと潰しにするように、四本の楔をくさび抜けば、岩の天井が一ぺんに落ちるようになって居る筈だ、

有^{ありがた}難いことには、先祖の石坂左門次様が、皆んなそれを書き遺してくれたよ」

「――」

「楔は四方に立っている、四つの小さい地藏様だ。こいつを一つ一つ抜けば宜い、宜いか、そら、一つ、二つ」

「――」

「念仏でも称えるが宜い、これが三つ目だ」

何やら大きな音をさせて倒すと、小石が天井から雨のように降ります。

「四つ目を抜くよ」

海道丸の声と共に、お滝は丈太郎に縫^{すが}り付きました。

「山浦さん、三年越、私は忘れ兼ねました。たったひと言」

「お滝」

山浦丈太郎の手は、お滝の肩を引寄せて居たのです。お滝の思いの外の善良さが判ると、丈太郎の心の中に、関所役人時代の誼^{よし}みが蘇^よみ返えったのでしよう。

「嬉しい、山浦さん」

二人の激情には構わず、

「いいか、四本目だぞ、こいつは少し固いや」

海道丸の声と共に、ひとしきり又小石の雨が降りますが、一瞬の後に迫る死も忘れて、丈太郎とお滝は夢心地に顔を見合せて居りました。

「入口の扉の側が宜いぞッ」

空善は天来の啓示にハツと気が付くと、男女二人の陶醉を破つて、グイグイと岩の扉の下に押やりました。

同時に、ガラガラドシンと天柱地軸も崩るる音、立昇る土煙けむりに、暫くは何が何やら解りませんが、間もなく、山浦丈太郎とお滝は、自分達だけは無事だった事に気が付きました。

「御坊、御坊」

「此処ここじゃ、手を、手を貸して下さい」

見ると、岩と岩との間に挟まって、雲水空善は身動きもならぬ有様です。幸い天井が落ちたので、中天の月が明る過ぎるほどよく照して居ります。

「御坊、お怪^け我は？」

「少し重過ぎた、腰が砕けてしもうたらしい」

振り仰ぐ青い顔、淋しい笑はコビリ付いたまま、死の色が次第に濃くなり行きます。

「御坊」

「約束事じゃ、大久保石見守の子孫の末、七万両の金が身近にあると聴いて、理窟^{りくつ}をつけて引寄せられた愚僧に、私心は無かったにしても、出家の心構えでは無かった」

「御出家様」

千貫の岩に挟まれて、腰から下を泥のように砕かれた雲水空善の手を取って、白糸のお滝は泣くのです。

「石坂左門次の子孫も可哀想であつた、が、海道丸は才智に任せ
て敵を討ち過ぎた、あれ」

空善のふるえる指先の方を見ると、天上の大岩と一緒に落ちた
海道丸は、その岩にひしがれて、ぼろきれ襪褌布のようになって死んで居
るではありませんか。

「解つたか、お滝殿、山浦氏、これが因果の理法だ——仲よく暮
されい、——お二人だけが許されたのだ」

「御坊」

「もうお別れじや、さらば」

二人の縋るに任せたまま、手を合せて仏の名を称える空善の声
あたり
は、次第に四方の蟲の声に没して行きます。

七万両の黄金が、江戸へ持出されて何うなるか、それにもいろいろ話がありますが、暫く私は、箱根の夜の伝奇に止めようと思
うのです。

青空文庫情報

底本：「野村胡堂伝奇幻想小説集成」作品社

2009（平成21）年6月30日第1刷発行

底本の親本：「女軽業師」東方社

1957（昭和32）年9月

初出：「新青年」

1939（昭和14）年11月～12月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2015年6月9日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

大江戸黄金狂

野村胡堂

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>